

『 共におられる救い主 』

マタイによる福音書 1章 18～25節

青木 信太郎 牧師

Merry Christmas! 皆さんクリスマスおめでとうございます。今年のクリスマスはいつもと少し様相が違います。世界中が新型コロナウイルス感染症の脅威にさらされています。私たちの教会も悩みに悩みましたが、密に気をつけつつ、こじんまりとクリスマスを祝うことと致しました。コロナ禍という言葉が多用されるように、今年は災いの一年であったと言えるでしょう。私たちは災いに直面するとき、そしてその渦中の中に放り込まれるとき、無力感を覚えます。苦しみと悩み、悲しみ、そして絶望感をも味わいます。その中で私たちが求めるものがあるとすれば、それは希望であり安らぎ慰め、励ましでしょう。暗闇に必要なのは光です。今日、私たちはイエス・キリストの誕生をお祝いしています。それはイエス・キリストが私たちのいのちと人生を照らす光として生まれてくださったからです。

◆ イエス・キリストの父とは

【18節 イエス・キリストの誕生は次のようであった。】今朝の聖書箇所はこの様な書き出しとなっていますが、マリヤの夫であるヨセフに焦点が当てられていることが分かります。

私たちがヨセフに注目するとき最初に確認できることは「イエス様の“父ヨセフ”とは記されていない」ということです。【18節 その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが】その胎にイエス様を宿したマリヤは“母マリヤ”と記されているにもかかわらず、聖書ではヨセフのことを“父ヨセフ”とは記していないのです。直前のイエス様の系図の結びの箇所16節においても【ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。】という様に、イエス様がマリヤから生まれたことは明記されるものの、ヨセフはマリヤの夫ヨセフと記されているわけです。それは既に皆さんもご存知のように、イエス様お誕生の原点は神様の不思議な力による事実であるということです。私たちがごくごく常識的に一般的に考えるようにヨセフとマリヤの夫婦の営みの中でイエス様が生まれたわけではありませんでした。【18節 ふたりがまだいっしょにならないうちに】【25節 子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく】とは、イエス様誕生までマリヤが処女(おとめ)であったという事実が強調されているわけです。ここで重要な点は、イエス・キリストのご懐妊が人間の営みによるものではなく、神様の偉大な力と業によるものであるということです。それは異教のギリシャ神話に見るゼウスなどの神々が人間の女性と一緒にあって多くの子孫を産むなどという下世話な話しではありません。【18節 聖霊によって身重になった】【20節 その胎に宿っているものは聖霊によるのです】とは私たちの思いや想像を超越した神様の不思議な偉大な力と業の現われであるということです。ですから正確には、神のひとり子イエスなのであり、イエス・キリストの父なる神様であるわけです。

◆ ヨセフでなければ

確かに聖書では“父ヨセフ”と記されておられません。しかしマリヤとヨセフという一組の夫婦のもとで私たちの救い主イエス様はお生まれにならなければなりません。それが神様のご計画であり定めでありました。それはヨセフに焦点を当てることにより明らかになるのです。私たちがヨセフに注目するとき二番目に確認できることは「ヨセフはダビデ王の家系、子孫であった」ということです。このマタイ福音書の冒頭のイエス・キリストの系図は【1節 アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図】と明記されています。この系図で強調されていることは、ユダヤ民族の偉大な父祖アブラハムから始まり、そしてユダヤ民族の偉大な王ダビデの家系にキリストがお生まれになったということです。旧約聖

書には多くのメシヤ預言が記されておりますが、ダビデ王の家系・血筋に真の王であるメシヤ(救い主)が出現することが預言されています。【参照 イザヤ書9章6,7節 11章1節】私たちの救い主イエス様は母マリヤの胎からお生まれになりました。と同時に旧約聖書に預言されている通り、ダビデ王の家系にお生まれになってくださったのです。それは間違いなく、ダビデ王の血筋であるヨセフの家にお生まれになる必要があったということなのです。ダビデ王の家系に救い主が生まれるという旧約の預言は、ヨセフという人物を通して成就しているということをマタイ福音書は伝えています。それが父なる神様のご計画であり、定めであったのです。この後触れますが、絶望と葛藤で苦しむヨセフの夢の中に現れた主の使いはヨセフにこのように呼びかけています。【20節 ダビデの子ヨセフ】と。

◆ もたらされる希望

私たちがヨセフに注目するとき最後に確認できることは「ヨセフは間違いなく最初に救い主イエス様を心にお迎えした人物である」ということです。当時のユダヤ人社会における婚姻制度を知っておく必要があります。それは何段階ものプロセスを経ているからです。＜①両家が先ず結婚に合意する②花婿側から花嫁の父に花嫁料が支払われる③両家の婚姻関係を公に発表する④一年間それぞれ別々に両親のもとで生活する⑤一年後に共に生活を始める＞ヨセフがマリヤの妊娠を知ったのは四番目の段階であったと思われます。【v18 聖霊によって身重になったことがわかった】と記されていますが、このときヨセフはマリヤの妊娠が聖霊なる神様の業によるものであることは知りませんでした。それぞれお互いの両親のもとで生活している段階でしたから、当事者同士が自由に行き来することは出来ませんでした。ルカ福音書ではマリヤは主の使いから受胎告知を受けていますが、その事実をヨセフにはまだ伝えられていなかったということでしょう。ただマリヤが妊娠したことはごく内輪の家族間を通じて伝わって来たと考えられます。ですからヨセフは気が動転したことは言うまでもありません。無論、自分には全く心当たりはありません。まさか別の男と、、、など考えたくもありません。しかし普通に考えればそうでしかありません。事件に巻き込まれた、、、不注意が重なった、、、いずれにしろ気が動転したでは済まない恐ろしいほどの絶望と苦しみ、悲しみに陥ったことでしょう。【19節 夫のヨセフは正しい人であって】すなわち旧約律法を忠実に守ろうと心がけていた人であったということなのです。ですから彼は【彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせよう(内密に離縁しよう)と決めた】のであります。と言うのも、律法によれば婚姻関係にある不貞に対しては、石打の刑に処罰するか若しくは申命記24:1の教えに基づいて離婚状を書き、それを法廷に提出して離婚を公表するのが常となっております。しかしそれはマリヤが姦淫の罪人であると周知されることに他なりません。律法に忠実であろうとするヨセフですが、マリヤが姦淫の罪人であると周知されることを望まなかったということなのです。ですから家族、近親の者にだけこの事実を公表してマリヤと離縁しようと考えたのです。【20-22節】ヨセフは葛藤し苦悩してまいりました。そんな彼は夢の中で幻を見るのです。主の使いが現れてヨセフに語り掛けました。【ダビデの子ヨセフ】ヨセフがダビデ王の血筋に繋がっていることをヨセフ自身にしっかりと認識させる語りかけです。【恐れなくてあなたの妻マリヤを迎えなさい】主の使いは「今あなたが思い巡らしている方法ではなく、このまま婚姻関係を全うすることを恐れず、妻マリヤを迎え入れなさい」と告げるのです。そして御使いはヨセフに大変重要な事柄、真実を語っています。一つはヨセフの絶望、葛藤、苦悩の原因を取り除く知らせです。【その胎に宿っているものは聖霊によるのです】ここで始めてヨセフは真実を知らされるのです。マリヤ懐妊は不貞によるものではなく、人知を超えた神様の力ある業によるものであることを。次に告げられた事柄は【マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい】ということであり、イエスという名は「神は救いである」という意味です。当時のユダヤ社会にあってはポピュラーな名前でしたが、ここで注目すべきは名付け親はヨセフではなく父なる神様であるということなのです。そして次にヨセフに告げられた内容は、生まれてくる男の子こそメシヤ(救い主)である

ということでした。【この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です】当時のユダヤ人は確かにメシヤを待望していましたが、それはダビデ王以降分裂したイスラエルが他の国から支配され圧政を強いられている苦難の中からのメシヤ待望が主流でありました。しかし今ヨセフには、これから生まれる男の子こそ【ご自分の民をその罪から救ってくださる】メシヤ(救い主)であるという真実が知らされたのです。

絶望と苦悩、葛藤の只中にいたヨセフに主の使いを通してもたらされた神様からの御告げは、ヨセフに励ましと慰め、希望を与えました。ヨセフに光をもたらしたのです。まだ疑い続けることも出来たかもしれません。このお告げを拒むことがあっても不思議ではありません。しかしヨセフはこの驚くべき知らせを信じました。【24-25節】ヨセフは聖霊なる神様の業によるマリヤ懐妊を信じて受け入れました。生まれてくる子はイエス「神は救いである」であり、救い主である事を信じて受け入れたのです。生まれてくる子が、すべての人の罪を赦して滅びから救ってくださる救い主であると信じて受け入れたのです。これを信仰と呼びます。ヨセフが正しい人であったから信じる事が出来たわけではありません。【22節】ここで言われている預言の成就とは、イエス様誕生についてだけではなく、ダビデの血筋であるヨセフがこの驚くべき事実を信じて受け入れた出来事が神様のご計画であり定めであったと説明しているのです。著者マタイは旧約預言イザヤ書7:14を引用しています。【23節】インマヌエルとは救い主(メシヤ)の別名、呼称です。【神は私たちとともにおられる】という意味です。このヨセフの信仰物語にインマヌエルの意味が明らかにされています。ヨセフは救い主イエス・キリストの誕生とその意味を信じて受け入れることにより、絶望と苦悩のどん底から光を見出し、希望が与えられたのです。神は私とともにいてくださるのだと。

◆ まとめ・お勧め

今から2,000年前、イエス様はユダヤのベツレヘムの家畜小屋でお生まれになりました。それはすべての人の罪を背負って十字架に掛かるためでありました。そしてそれを信じる者を救うためにお生まれになってくださったのです。【神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハ3:16,17)】既に2,000年を経た今もこの良き知らせは聖書を通して私たちに届けられています。今日このクリスマス礼拝において、救い主イエス・キリストは私の罪を赦すために生まれてくださったということを心に受け入れて信じていただきたいと願って止みません。信仰を持って救い主イエス・キリストを心にお迎えするとき、私たちは光を見出すのです。希望が与えられるのです。罪ゆえに滅びに向かっている暗闇の人生から私たちは救い出されているのです。そして私たちの日々の歩みにおいて救い主イエス様は共にいてくださるのです。確かに私たちの歩みは順風満帆ではないでしょう。苦しみと悩み、悲しみ、そして絶望感で一寸先は闇と思えるような危機に陥ることもあります。しかし私たちと共におられる救い主イエス様は、必ず私たちに必要な励ましと慰め、希望を与えてくださるのです。このマタイ福音書はインマヌエル「神は私たちとともにおられる」で始まり、一番最後はイエス様のことば【見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがとともにいます。(28:20)】で閉じられています。ぜひインマヌエル、私たちと共におられる救い主イエス様を心にお迎えするクリスマスと致しましょう。